日本語複合動詞の語構成に関する一考察
―六つのペアの一二種の後項動詞を中心に―

呉　美善

1. 研究の動機

単語は語構成的に、それ以上分解できない単純語と、意味及び形態上二つ以上の要素に分解できる合成語に分けられる。合成語は構成要素の性質により、派生語と複合語に更に分けられる。派生語は一つの単語と一つ以上の非独立要素、即ち接辞との結合によって成り立つものである。これに対して複合語は、本来単独の意味・用法を持つ二つ以上の形式が結合して、新たに一語としての意味・用法を持つ(注1)ようになった造語型である。

複合語には、名詞（花見）、動詞（舞いあがる）、形容詞（名高い）、副詞（わざわざ）、代名詞（われわれ）、接続詞（だから）等大部分の品詞が存在する。また、大部分の品詞がその構成要素として用いられる。韓国語と日本語の複合語を比べた時、目立つ相違点の一つとして複合動詞の使用範囲及び頻度数等をあげることができる。日本人は、数多くの複合動詞を使いこなして、単一の動詞では表し得ない効果を作り出したり、表現を多様化したりするが、驚くことによく使われている複合動詞はその数があまり多くないということである。

複合語は二つの要素で成り立つものが多いが、普通前の要素を「前項要素」、後の方を「後項要素」と言う。複合語において独自な品詞性を持つものは後項要素である(注2)ので、後項要素に動詞が用いられたものは複合動詞になることが多い（「花見」のように後項要素の動詞が連用形である場合、名詞になるものもある）。複合動詞を構成要素によって分類すると、「名詞＋動詞」、「形容詞＋動詞」、「形容動詞＋動詞」、「副詞＋動詞」、「動詞＋動詞」等の形態が見られるが、この中で前項要素に動詞が用いられている「動詞＋動詞」の形態が主流を成している。狭義の複合動詞として「動詞＋動詞」の形態だけを取扱う例も多い。この場合、前項要素の動詞を「前項動詞」、後項要素の動詞を「後項動詞」と称する。複合動詞を後項動詞別に整理していくと、多数の動詞の連用形と結合し広範囲な複合動詞を構成する後項動詞はその数が限られていることがわかる。このような後項動詞は多様な意味と特殊な用法を持つが、いずれも日本語学習の初期段階に出てくる基本的な動詞である。また、複合動詞になると、単独で用いられる時の意味・用法をそのまま表わす時もあるが、複合の際新しい意味・用法を持つ場合も少なくない。

外国語として日本語を習うものにとって、言語生活のいたるところで出会う複合動詞を理解することは容易な問題ではない。また、単純語の基本的な動詞を覚えさせたり、

用例を説明したりする段階で終わる日本語の訓練を受けただけのものが、複合語の動詞を自由自在に使いこなすことは非常に困難なことである。このような理由からも、単純語の形態につづいて複合語の形態も整理して教えることが必要になってくる。複合動詞を理解するためには、多くの複合動詞を構成する後項動詞から整理していく方が望ましい。後項動詞をそれぞれ例をあげながら、意味の分類、伴う助詞及び副詞などの用法、よく結合する前項動詞などを整理すれば、学習者の複合動詞についての理解を助けることになるのではなかろうか。修士論文では、基本になる後項動詞の中から一二種を選定し、その基礎的な研究分析を試みた。以下は修論を要約したものであるが、紙面の制約があって、文例をあげることができなかった。詳しい各論は次の機会にゆずりたいと思う。

2. 研究の対象及び方法

用例をとる資料としては、基本的な文型を正しい日本語で表現していると認められる小学校の国語の教科書を用いた。数種類あるが、その中で採択率が圧倒的に高い「光村図書出版社」と「教育出版株式会社」の教科書、一年から六年まで合わせて２４冊を選定し、出てくる複合動詞を集めた。

その複合動詞を、「〜あげる」、「〜かける」のように、後項動詞によって分類すると、１５０種の後項動詞にまとめられる。いろいろな動詞の連用形と結合し広く複合動詞を構成する後項動詞を選び出すため、それぞれの後項動詞を結びつく前項動詞の種類の多い順に並べた。１０語以上の動詞に接続する後項動詞は２３種にすぎない。その中から、単独で用いられる時、「あがる－あげる」のように自動詞・他動詞の対立が見られるもので、両方とも多くの複合動詞を構成する次の六つのペアを研究の対象とする。

- 「〜あう」と「〜あわせる」
- 「〜あげる」と「〜あがる」
- 「〜かける」と「〜かかる」
- 「〜きる」と「〜きれる」
- 「〜だす」と「〜でる」
- 「〜つける」と「〜つく」

考察は、「個別的考察」と「総合的考察」の二つに分かれる。

「個別的考察」では、まず、それぞれの後項動詞を担う意味によって分類する。分類された各グループの語例と文例をあげ、結合する前項動詞の種類及び前項・後項の意味関係、それに伴われる助詞及び副詞（句）の種類、よく用いられる形及びニュアンスなどについての考察を行う。次に、単独で用いられる時対立する自動詞あるいは他動詞との対応関係を調べる。複合動詞の後項動詞になると、新たに持つようになる意味・用法などもあって、単独で用いられる時の対応関係とは違う面が把握できる。

「総合的考察」においては、六つのペアー二種の後項動詞について次の四つの考察を総合的に行う。前項要素の種類、自動詞・他動詞の構成から見た前項・後項の結合関係、前項動詞の『分類語彙表』(注3)による分類、複合した形の活用形及び用例の最も多い連用形の接続語（句）等を調べる。

3. 「個別的考察」の要約

3－1 「～あう」と「～あわせる」

「～あう」は、単独で用いられると、離れている二つ以上のものが接近または接触し、お互いに何らかの関係を持つ状態におかれることを表す。(注4) 複合動詞の後項要素になってもこの意味をそのまま表わす場合が多い。即ち、二つ以上の主体が同じ動作を「お互いに」（与えあう）、あるいは「ともに」（抱きあう）行うという意味を表わす場合が多い。また、「込みあう」のような、単独で用いられるときにはない強調の用法もある。前項要素には自動詞・他動詞が同じように用いられるが、複合すると自動詞になる場合が多い。「～ている」「～た」という形で、状態を表わす場合が多い。複数の概念を帯びる主体または相手を示す「に」「と」を伴う場合が多い。意味を強めるために、「（お）互いに」「みんな」のような語句が用いられる場合も多い。

「～あわせる」は単独で用いられると、自動詞「あう」に対立する他動詞で、対象とあうことが作為できる場合に限って用いられる。後項動詞になると、ほとんど他動詞の前項動詞と結合して、客体が対象とあうようにすることを表わす。複合しても他動詞になるものが多いが、「来あわせる」のように自動詞になって、単独で用いられるときにはない「偶然に」という意味の無意志的動作を表わす用法もある。「～あう」とは違って、複数の概念は客体に現れる場合が多く、「込みあう」のような強調の意味を添える用法はない。

3－2 「～あがる」と「～あげる」

「～あがる」は、単独で用いられると、人・物・事柄が上部へと移動することを表わす。後項動詞になると、「上部への移動」のほかに、「動作の完了」「程度の強調」「尊敬」など多様な用法を持つ。「上部への移動」（浮きあがる）を表わす場合は、前項動詞は移動の手段・方法・様相を表わし、出発点を示す「から」「を」、到着点を示す「に」「へ」「まで」などを伴う場合が多い。「動作の完了」（織りあがる）の場合は、前項動詞には何らかの技術や労力をふるって作業をするという動作動詞(注5)が多い。状態を表わす「～ている」「～た」の形をよく用いる。「程度の強調」（乾きあが

る」は「完全に」「すっかり」「非常に」のような程度副詞でかえられる。この「〜あがる」は、自然現象か人間の心理状態などを表わす表現に用いられる。(注6)「尊敬」とは「召しあがる」のことで、前項の「召す」、後項の「あがる」それぞれに尊敬の意味があり、それぞれ単独でも用いられる。

このように多様な用法を持つ「〜あがる」は、上部への、完了への、極度の状態への変化を表わすもので、複合すると「召しあがる」を除いてすべて自動詞になる。前項動詞もほとんど自動詞である。

「あげる」は「あがる」に対立する他動詞で、人物・事柄を上部へと移すことを表わす。後項動詞になると、「〜あがる」の用法とほとんど同様で、共通する前項動詞も多い。「〜あがる」と異なる用法を中心にまとめると次のようになる。

「上部への移動」の場合、「〜あげる」は単独で用いられると、客体が主体によって移されることを表わすが、後項動詞になると、「水が吹きあげる」のように自動詞になって主体の移動を表わす場合もある。また、全体的上昇・部分的上昇などほとんどの場合「〜あがる」に対応するが、「わらいがこみあげる」のような人体内の上昇を表わす「〜あがる」の例はない。

「程度の強調」の場合、「〜あがる」は自然現象、人間の心理状態など無意志的状態を表わすが、「〜あげる」は「磨きあげる」のような意志的行為を表わす。

「動作の完了」の場合、「〜あげる」は完成品を伴うものが多いが、「〜あがる」の形に直すと、その完成品は主体となり受動的な意味を帯びるようになる。「ぬのを織りあげる」は「ぬのが織りあがる」のように。

「取りあげる」は、上位者（力関係に於いて）が下位者から何かをとることを意味するもので、本来の「尊敬」の意味とは異なるが、力の上下関係が認められるので、「尊敬」の範疇に入れた。「召しあがる」のように前項・後項それぞれ単独で用いることはできない。また、「〜あげる」は「〜あがる」にはない謙譲の用法（申しあげる）をも持つ。

3－3　「〜かける」と「〜かかる」

「〜かける」は単独で用いられると、不安定な状態にあるものを安定した状態にする意味を表わす。(注7)後項動詞になると、「客体を安定した状態にする」という意味のほかに、ある対象に動作・作用を向ける「指向」と、新しい状態に入る「開始」の意味をも表わすようになる。

「立てかける」のように「客体を安定した状態にする」意味の場合は、支えになる対象が助詞「に」などで示される。前項動詞はその方法・手段・様相などを表わす。「〜ておく」の形をとる例が多く見られる。

「指向」の「〜かける」は、「誘いかける」のように相手の反応を期待する心理的なものが多い。また、「押しかける」「詰めかける」のように、主体自らある場所にある目的を持って移動する(注8)意味を表わすものもある。つまり、「客体を安定した状態にする」の「〜かける」と同様に意志動詞の役割をする。方向性を表わす「〜ていく」「〜てくる」のような形をよく用いる。

「開始」の「〜かける」は、瞬間動詞と結合してある動作・作用が行われる寸前の状態に達することを表わす（成りかける）ときもあるが、主に継続動詞と結合してある場合がはじまって途中まで行われたことを表わす(注9)（行きかける）。開始の意味を表わす「〜かける」の前項動詞はすべて「〜かかる」とも結合する。しかし、その逆は成立しない。

「〜かかる」は単独で用いられると、安定ではない状態にあるものが他の物を支えとして安定の状態になることを表わす。後項動詞になると、「〜かける」とほぼ同様な用法を持つ。「安定な状態にする」と「指向」の場合、「〜かける」はすべて意志動詞の役割を行うが、「〜かかる」は前項動詞が意志動詞の場合は意志動詞に、前項動詞が無意志動詞の場合は無意志動詞になる。「〜かける」「〜かかる」両方とも、対象を表わす「に」「へ」などを伴う。

「開始」の「〜かかる」は瞬間動詞について、ある動作・作用が行われる寸前の状態に達することを表わす。(注10)

3－4　「〜きる」と「〜きれる」

「〜きる」は、単独で用いられると「切断」の意味を表わすが、後項動詞になると「切断」のほかに、「動作の完了」と「極度の状態」をも表わす。

「切断」の場合は、「噛みきる」のような物理的な切断のものと、「言いきる」のように切るように「きっぱり」「はっきり」と動作・作用を行うことを表わす場合とがある。

「動作の完了」の「〜きる」は、人間（有情物）が主体となって、ある動作を終わりまで行うという意志的行為を表わす。つまり、ある基準があって、その基準の所に完全に達し残りがないというニュアンスを帯びる。これとは違って、完了を表わす「〜あげる」は、完成品を伴う場合が多い。「食べきる」と「織りあげる」のように。

「極度の状態」の「〜きる」は、「乾ききる」のようにそれ以上進むことのできない極度の状態に達したことを表わす。自然現象と人間の心理的・生理的現象を表わす表現として用いられる。「非常に」のような語句に言いかえられるもので、「弱りきる」のように人間の心理的・生理的現象を表わすものは、「よくないこと」というニュアンスを(注11)帯びる場合が多い。ほかの「〜きる」とは違って、「極度の状態」を表わす

「〜きる」は無意志的動詞である。「〜きった」という形で「連体修飾語（句）」になる例が多く見られる。

個別的考察を行った他の五つの他動詞の後項動詞は、他動詞の前項動詞と結合して他動詞の複合動詞になる場合が多いが、「〜きる」は自動詞の前項動詞と結合して自動詞の複合動詞になる場合が多い。

「〜きれる」は、単独で用いられると「きる」に対立する自動詞で、「鋭利」「切れた状態になる」「切ることが可能」のような意味を表わす。(注12) 「鋭利」の意味を表わす後項動詞「〜きれる」の例はない。また、「切れた状態になる」という意味の「〜きれる」の例も少く、「〜きれる」のほとんどは「切ることが可能」という意味を表わす。可能動詞は意志的なコントロールが可能な場合だけ成り立つため、「極度の状態」の意味を表わす「〜きれる」は成立しない。つまり、「〜きれる」は「切断」と「動作の完了」の場合のみ成立する。打消の助動詞「ない」と接続した「〜きれない」の形で不可能の意味を表わす表現がほとんどである。程度を表わす「ほど」を伴う例も多い。

このように「〜きれる」に可能の意味が現れるのは、五段活用の他動詞に対立する下一段活用の自動詞がそれ自体他動詞の可能形としての性質を持つためである。(注13) また、個別的考察を行った他の五つの自動詞の後項動詞とは違って、可能を表わす「〜きれる」の例はすべて他動詞の前項動詞と結合して他動詞の複合動詞になるものである。

3－5　「〜だす」と「〜でる」

「〜だす」は、単独で用いられると客体を内から外へ移すことを意味する。後項動詞になると、「外部への移動」と「開始」の意味を表わす。

「外部への移動」の「〜だす」には、主体自らの移動を表わすものがあるが、この「〜だす」は「はいでる」のように「〜でる」に言いかえられるものが多い。その他の「外部への移動」の「〜だす」の前項動詞は、客体を出す主体の動作を表す部分となるが、前項動詞自体に移動のニュアンスを帯びるものが多い。また、「映しだす」のように、無の状態、内部に秘められて感じられなかった状態から、感覚器管でとらえられる事柄を表に現わす (注14) という意味を表わす場合もある。つまり、「〜だす」の内部から外部への移行現象が、結果としてある新しい状況を作るものを後に残すものである。「外部への移動」の「〜だす」は、出発点を示す「から」と到着点を示す「に」などを多く用いる。

「〜だす」は、行為・作用が継続的な動作や反復動作、多数の主体によってなされる連続動作である場合は開始の意を帯びる。(注15) つまり、「開始ー継続ー終了」(注16) の時間的経過を有する動作・作用を表わす継続動詞と結合しやすい。瞬間動詞も、いくつかのある同じ動作・作用が適当なインターバルで時間の経過にそって並ぶ場合は、一

つの過程とみなすことができる(注17)もので、開始の意味を表わす「〜だす」と結合する。

「〜でる」は、単独で用いられると「だす」に対立する自動詞で、「内から外への移動」を表わす。複合動詞の後項要素になっても、その意味をそのまま表わす。「〜だす」のような、「開始」の用法は持っていない。「でる主体」「でる起点」「行く先」の三要素(注18)の上に成り立つ。「でる主体」には人間・事物両方とも用いられる。「でる起点」は「から」「を」で、「行く先」は「に」「へ」などで示す。「〜だす」に言いかえられるものが多いが、「進みでる」「暴れでる」のようなものは「〜だす」の形になると、「開始」の意味を表わす。

だいたい自動詞の前項動詞と結合して自動詞の複合動詞になるが、「訴えでる」「願いでる」のように他動詞の前項動詞と結合する場合もある。この場合の前項動詞は移動の目的を表わすもので、主体には人間が用いられる。また、出る場を示す「に」を伴う。

3－6　「〜つける」と「〜つく」

「〜つける」は、単独で用いられると、「二つのものを解れあわせて離れない状態にする」、「新しい状態をおこし、加える」(注19)などの意を表わす。複合動詞の後項要素になると、「到着」「接着」「指向」「強調」「習慣」などの多様な用法を表わす。

「到着」の場合、「〜つける」は主体自ら到達点に移動して到着するという意を表わす。移動のニュアンスを帯びる動詞が前項動詞に用いられて、「駆けつける」のように主体の緊迫感や大げさな感じを表わす場合が多い。(注20)

「接着」の「〜つける」は、単独で用いられるときの「AヲBニつける」という文型の接着の意味と同じ用法を持つ。前項動詞は接着の手段、方法、様相などを表わす。接着する対象は助詞「に」で示す場合が多いが、「結びつける」のように「と」を使う場合もある。

対象に動作・作用を向けるという「指向」の意を表わす「〜つける」は、単に、動作・作用を対象に向けるという意味を表す「〜かける」とは違って、客体によって対象に何らかの悪い結果が残されるか、強調の表現が伴われる場合が多い。また、「売りつける」のように、一方的な行為で対象（主に人間）の意志・気持とは関係なく、「行為を押しつける」という意を表わす場合もある。動作・作用が向けられる対象は助詞「に」などで示す。

「強調」の「〜つける」は、「指向」「接着」の意味をも表わす場合が多い。単なる「指向」「接着」とは違って、対象を示す「に」格を必要条件としない。前項動詞のとる「を」格がそのまま「〜つける」にも用いられる。

「〜つける」は「行きつける」のように、何度もくり返せる意志的行為を表わす前項

動詞と結合し、(注21)「慣れて〜する」という慣習化の意味を表わす場合がある。

「〜つく」は、単独で用いられると、離れて関係のなかった事物が、他の事物または場所に接触し、離れぬ状態となる。また、その結果、その事物の状態に変化が生じ、新しい状態に変わることを表わす。(注22) 複合動詞の後項要素になると、「到着」「定着」「接着」「指向」「新しい状態」などの意味を持つ。「〜つける」と違う面を中心にまとめてみる。

「到着」「接着」「指向」の場合、「〜つく」は「〜つける」に対応する。ある距離を移動した後、目的地に到着して、そこから離れないでいることを表わす「定着」と、多く自然現象を表わす表現として用いられ、変化が進んで新しい状態に達することを表す「新しい状態」の場合、「〜つける」の例は見つからなかった。「〜つく」にない「〜つける」の用法は、「強調」と「慣習化」を表わす表現である。

4. 「総合的考察」の要約

4－1 構成要素の種類

複合語の品詞を決定するものは後項要素であるため、複合動詞の後項要素には動詞が用いられる。「個別的考察」を行った六つのペアの一二種の複合動詞の前項要素には、名詞、形容詞、副詞、動詞があるが、数の面からは動詞が前項要素になっているものが94％で、複合動詞の主流を成している。

前項要素が名詞である場合、「心がける」「片づける」「気づく」のように後項要素の語頭清音が濁音化するものがある。「連濁」(注23) と称する現象で、次のような傾向がまとめられる。

ⓐ前部が後部に対する目的格のものは連濁し難い

- 腰（を）＋かける→腰かける
- まり（を）＋つく→まりつく

ⓑ音的関係から見て、発音の直後は連濁しやすい。

- 感＋つく→感づく

ⓒ前項の最後の音節が清音の場合は連濁しやすい。

- 目＋かける→目がける

形容詞は「近」のような語幹の形で前項要素になる。「近づく」「近づける」の後項の語頭清音が濁音化したのは、名詞の場合と同様に、前項の最後の音節が清音であるために起った現象であろう。

一二種の後項動詞の中で、前項要素に副詞が用いられたのは、「〜つく」の例しかなかった。「〜つく」の前項要素になる副詞は次のようなものである。(注24)

ⓐ擬声語・擬態語
ⓑ四音節であって、二音節のくりかえし音（畳語）を持つもの
ⓒその中で「する」と結びつくもの
ⓓどちらかといえばマイナス評価を持つもの
前項動詞は連用形の形で用いられる。複合動詞（飛びおりだす）、サ変動詞（がまんしきる）、使役動詞（見せあう）等が前項要素になる場合もあるが、９０％の例が単純語の動詞（巻きつける）である。

４－２　自動詞・他動詞の区別

複合動詞の主流を成している「動詞＋動詞」の形を、構成要素が自動詞であるか他動詞であるかを考えた。
まず、後項動詞が自動詞である場合、「～あがる」と「～でる」には自動詞の前項動詞が多く、「～きれる」には他動詞の前項動詞が多い。全体的な割合を見ると、前項動詞が自動詞であるものと他動詞であるものはほぼ同じである。これに対し、複合した形は自動詞が８０％近い。つまり、後項動詞が自動詞である場合、前項動詞には自動詞・他動詞共に用いられるが、複合した形は自動詞に成りやすい。その中でも、自動詞同士で結合して自動詞になる例が全体の５２％で最も多い。
後項動詞が他動詞である場合、「～あわせる」「～あげる」「～つける」には、他動詞の前項動詞が多く、「～きる」には自動詞の前項動詞が多い。全体的な割合をみると、前項動詞が自動詞であるものは３０％、他動詞であるものは７０％である。複合した形は、自動詞が３５％、他動詞が６５％である。つまり、後項動詞が他動詞である場合、前項動詞には他動詞が多く、複合した形も他動詞になりやすい。他動詞同士で結合して他動詞になった複合動詞が６４％で最も多い。

４－３　『分類語彙表』の分類

「動詞＋動詞」の形の複合動詞の場合、どのような性格の語が結合しやすいかを『分類語彙表』に基づいて調べた。『分類語彙表』というものは、語彙を構成する一つ一つの単語がそれぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表し得る意味を分類し、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。動詞は「用の類」に属して、次の三つに大別される。
ⓐ抽象的関係（人間や自然のあり方のわく組み）
ⓑ人間活動－精神および行為
ⓒ自然－自然物および自然現象

この分類から予想される前項動詞と後項動詞との組み合わせとして次の九型がとりあげられる。

- 抽象的関係＋抽象的関係
- 抽象的関係＋人間活動
- 抽象的関係＋自然
- 人間活動＋抽象的関係
- 人間活動＋人間活動
- 人間活動＋自然
- 自然＋抽象的関係
- 自然＋人間活動
- 自然＋自然

東辻保和氏は、武部良明氏の複合動詞後項の中で補助動詞的要素としてとりあげた１７５語について、『分類語彙表』によって意味分類して、２２語を除いた１５２語が「抽象的関係」の語であるという結果を得ている。(注２５)「個別的考察」を行った六つのペアー二種の後項動詞は、「～あげる」の２例を除いてすべて「抽象的関係」に属するものである。また、前項要素と後項要素との結合においては、「抽象的関係＋抽象的関係」の形が４４％、「人間活動＋抽象的関係」が４５％で、合わせて９０％近くなる。東辻保和氏の源氏物語を資料とした調査の結果にも、前項「人間活動」＋後項「抽象的関係」という組み合わせが最も多く、とくに後項要素には「抽象的関係」に属する動詞が来ることが多いということがあげられている。(注２６)

４－４　活用形

連用形が最も多く、７５％になっているが、「～きれる」だけは未然形の例がほとんどである。これは、「～きれる」は「～きれない」という形で不可能の意を表わす場合が多いからである。連用形は、「～て」という形と「～た」の形になる例が多い。「～て」の場合は補助動詞を伴ったものが５０％位ある。また、「～ます」という形が多いが、これは資料が小学校の教科書であることから生じたことであろう。「～かける」に「～てくる」「～ていく」の形が多いのは、対象への働きかけである「指向」の意味があるからである。これに対して、主体の一方的な指向を表わす「～つける」には、「～てくる」の形は３例で、「～ていく」の形の例は１例もない。また、「～かける」と「～つける」に「～ておく」の形が見られるのは、「設置動詞」に属するものがあるからである。

5. 結び

以上、二種類の小学校の国語の教科書から採取した六つのペアの一二種の後項動詞の語構成について一考察を行った。これらの後項動詞は、いろいろな動詞の連用形に付いて広く複合動詞を構成する性質を持っているため、他の後項動詞とは区別され、「補助動詞」「助動詞」あるいは「接尾語」などの名称の下に扱った研究も多く見られる。しかしながら、鈴木丹士郎氏の指摘のように「実質的意味の稀薄の度合にも語によって差異が見られる」(注27)ことであって、後項動詞は複合の際、単独で用いられるときの意味がそれぞれ変化し、いろいろな度合を見せるようになるのではないかと思われる。このような意味で、後項動詞の中には「飛び跳ねる」の「〜跳ねる」のように「補助動詞」などとははっきり区別できるものもあるし、「動き出す」の「〜出す」のように「補助動詞」などとは区別しにくいものも見えるのではないか。つまり、「補助動詞」などに最も近いものから遠いものまで、連続的に並んでいるもので、後項動詞と「補助動詞」などとを明確に区別するのは非常にむずかしいことになる。

日本の国語辞書は日本人にはもちろん、外国語として日本語を学習する人にとっても、大きな手掛りとなるものであるが、複合動詞の基本的な説明は書かれていない。もちろん、日本人ならだれでも基本的なこととして、自由自在に複合動詞を使いこなしていると認められていることから、日本の国語辞書には複合動詞の基本ルールなど書かなくてもよいのかも知れない。しかし、このような発想は外国人には通じないもので、一つ一つ詳しく説明する必要があろう。また、学習効果をあげるためには、概念的説明と共に文例をあげたり、自動詞・他動詞あるいは類義語のようなペアを組んだりして具体的な説明をした方がよい。例えば、「開始」の意味を表わすものには、「〜かける」「〜だす」「〜はじめる」などがあるが、どのような差があるかなどについて整理することも必要である。

今後は、六つのペアの一二種の後項動詞の考察を基に、今回の考察では行うことのできなかった類義語的立場においての後項動詞間の比較をも添えて、複合動詞の考察をつづけたいと思う。また、その次の段階として、母国語の韓国語の複合動詞との比較的考察を行う予定である。両国語の相違点を整理することによって、韓国の学生たちが日本語の複合動詞を学習するとき、起こりやすいミスをなくすことができるのではないかと思われる。

(注)

注1：『国語学研究事典』、明治書院、(PP．108〜109)

注2：橋本四郎、「複合語・転成語」、『月刊文法』S．45．4、明治書院、(PP．75〜81)

注３：国立国語研究所、秀英出版
注４：森田良行、『基礎日本語１』、角川書店、（Ｐ．４）
注５：姫野昌子、「複合動詞　「～あがる」、「～あげる」および下降を表す複合動詞類」、『日本語学校論集』３号、（Ｐ．９８）
注６：注４に同じ（Ｐ．１２）
注７：注４に同じ（Ｐ．１５）
注８：『動詞の意味・用法の記述的研究』、秀英出版、（Ｐ．３４１）
注９：金田一春彦、「国語動詞の一分類」、『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房、（Ｐ．１７）
注10：注９に同じ（Ｐ．１７）
注11：姫野昌子、「複合動詞「～きる」と「ぬく」、「～とおす」」、『日本語学校論集』７号、（Ｐ．３１）
注12：注４に同じ（Ｐ．１８６）
注13：西尾寅弥、「自動詞と他動詞における意味・用法の対応について」、『国語と国文学』Ｓ５５．５　（Ｐ．１８４）
注14：注４に同じ　（Ｐ．３１５）
注15：注４に同じ　（Ｐ．２７３）
注16：姫野昌子、「複合動詞「～でる」と「～だす」」、『日本語学校論集』４号、（Ｐ．８７）
注17：吉川武時、「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、（ＰＰ．１９３～１９４）
注18：注４に同じ　（Ｐ．３１２）
注19：『学研国語大辞典』、学習研究社
注20：姫野昌子、「複合動詞・「～つく」と「～つける」」、『日本語学校論集』２号（Ｐ．６３）
注21：注２０に同じ、（Ｐ．６８）
注22：注４に同じ　（Ｐ．２９１）
注23：注１に同じ　（ＰＰ．９２５～９２６）
注24：注２０に同じ　（Ｐ．５５）
注25：「いわゆる複合動詞後項の意義論的考察」、『国文学放』、Ｓ．５１．１０
注26：注２５に同じ
注27：「動詞の問題点」、『品詞別日本文法講座３』、明治書院（Ｐ．１７７）